

2022年10月2日（日）「天に宝を積もう」

ガラテヤ 6:6-10

6 御言葉を教えてもらう人は、教えてくれる人と良いものをすべて分かち合いなさい。7 思い違いをしてはなりません。神は侮られるような方ではありません。人は、自分の蒔いたものを、また刈り取ることになるのです。8 自分の肉に蒔く者は、肉から滅びを刈り取り、霊に蒔く者は、霊から永遠の命を刈り取ります。9 たゆまず善を行いましょう。倦むことなく励んでいれば、時が来て、刈り取ることとなります。10 それゆえ、機会のある度に、すべての人に対して、特に信仰によって家族になった人々に対して、善を行いましょう。

【序論】

ガラテヤ書の学びも終わりが見えてきていますが、ここにきてパウロは信仰の実践的な側面を教えています。キリスト者が目標に掲げている「御霊によって歩む」ということを実行するために、何から取り組んでいけばよいか。私たち読者も、聖書を知識として理解するだけでなく、具体的な生活の中にその教えが反映されていくことを願っているでしょう。御霊の実を結んでいる自分をこの目で見たい。永遠に残る資産を持ちたい。そのために、パウロは二つのことを勧めています。第一に「働き人への愛」、第二に「同信への愛」です。ガラテヤ教会の歩みの中で欠けていた点が指摘されているのですが、このことは現代の教会にとっても「愛の実践」として心に留めておく必要があるでしょう。

【本論】

解説の前に、まずはこの箇所の構造を理解しておきたいと思います。私の中では以下のよう整理しました。

- ① 原則：種蒔きと刈り取り（7～9節）
 - (1) 肉に蒔く
 - (2) 霊に蒔く
- ② 実践：御霊によって歩む
 - (1) 働き人への愛（6節）
 - (2) 同信への愛（10節）

本論 1. 原則：種蒔きと刈り取り（7～9節）

思い違いをしてはなりません。神は侮られるような方ではありません。人は、自分の蒔いたものを、また刈り取ることになるのです。（6:7）

ここでは「蒔いた種の刈り取り」という、誰にでも理解できる原則が取り上げられています。植物や野菜を育てた経験のある方はすぐにピンとくるでしょう。我が家でも夏時期にミニトマトなどを育てていましたが、袋から取り出す種は本当に小さくて、気をつけなくてはすぐに見失ってしまいます。しかし、それを土に埋めて水やりを続けていくと、やがて芽が出て、驚くほどの大きさに生長していきます。そして、ついに収穫の喜びにあずかる日が来る。

この自然界の法則は、人間の倫理的な生活にも、良くも悪くも適用されます。小さな「原因の種」を蒔くと、それが知らないところで育ち、どこかで大きな結果となって返ってくる。良い実であればいいのですが、悪い実であると大変です。ただ興味深いことに、今日の箇所では「種」そのものよりも、種を蒔く「場所」が問題視されているのです。

自分の肉に蒔く者は、肉から滅びを刈り取り、霊に蒔く者は、霊から永遠の命を刈り取ります。（6:8）

人が種を蒔く場所が二つある。一つは「肉」であり、もう一つは「霊」です。「種」は同じであるかもしれない。しかし、土壌の如何によって刈り取る結果が違ってくる。今日の文脈に適合させて考えてみますと、「お金」は分かりやすい例です。同じ金額のお金を使うにしても、何に対して費やすかで、後に得られるものが変わってくるというのです。

(1) 肉に蒔く

「肉」について、No. 29 の説教の中で次のように説明させていただきました。

『肉』（ἐπιθυμία／エピスミア）とは、『願望』『欲求』『熱望』『禁じられたことへの願望』『情欲』などと訳される言葉です。人間であるならば誰もが持っている性質ですが、本来健全であるはずの欲求が罪と結びつくことで、自己中心的な願望へと様変わりするのです。『一貫して自己を主張し、自分の利益と欲望の充足を求める生き様』（高橋）。』

私たちが何か行動を起こそうとするとき、純粹に主のためであるか、実は自分の利益のためであるかをよくよく吟味しなくてはなりません。「主のため」という言葉を隠れ蓑にして、自分の目的を達成しようとしていることがままあるからです。それがどちらであったかは、やがて実る「実」によって分かります。

(2) 霊に蒔く

一方、「霊」とは「御霊」のことであり、「御霊によって歩む」ことを表しています。神に投資するとき、人は「永遠の命」を刈り取る。これは、私たちの地上の業によって「永遠の命」が獲得されるということを言っているのではありません。永遠の神の国に属する財産を蓄えるということ。それは、この世には属さぬ財産であって、主イエスのことばによるならば「天に宝を積む」ことでしょう。

あなたがたは地上に宝を積んではならない。そこでは、虫が食って損なったり、盗人が忍び込んで盗み出したりする。宝は、天に積みなさい。そこでは、虫が食って損なうこともなく、盗人が忍び込んで盗み出すこともない。あなたの宝のあるところに、あなたの心もあるのだ。

(マタイ 6:19-21)

本論 2. 実践：御霊によって歩む

では、「天に宝を積む」ための具体的な勧告に進んでまいりましょう。

(1) 働き人への愛（6節）

御言葉を教えてもらう人は、教えてくれる人と良いものをすべて分かち合いなさい。（6:6）

ここでは、伝道に従事している人々を経済的に支えることが勧められています。様々な形での支援がありますが、牧師、宣教師、宣教団体のスタッフ、神学生など、必要のあるところにささげていくことができます。もし福音の真理を語る人がいなくなったら、この世界は悪魔の支配だけが進んでいくことになるでしょう。世界がどんなに変わったとしても、その時代ごとに聖書を説き明かす人が残されていかななくてはなりません。この地に希望を残すためです。ですから、神の国の前進のために労している人々を支えることは、広い目で見てこの世界を守っていくことになるのです。

これからの時代、世界の大きな流れを見ると、牧師も専門でやっていくことが困難になるかもしれません。働き人も、何らか稼ぐ力を片手に持つ必要があります。AIの台頭によって、従来の仕事の多くがなくなるとも言われています。残されていく職業を見極め、能力を磨き続け、宣教との接点を見出しながら、時代を乗り越えていきたい。それと同時に、御言葉をじっくり学び祈る時間を確保しなくてはなりません。そのことを教会内でよく理解し合いながら、体制を整えていく必要があるでしょう。

宣教者を支えることは、「天に宝を積む」ための具体的かつ実践的な業です。神の国のバンクに預けておくと、やがて何十倍、何百倍もの祝福が返ってくることでしょう。

(2) 同信への愛 (10 節)

それゆえ、機会のある度に、すべての人に対して、特に信仰によって家族になった人々に対して、善を行いましょう。(6:10)

パウロが勧めるもう一つの業は、同じ信仰を持つ人々に愛を注ぐことです。10 節を注意深く読むと、「すべての人に対して」ということばが先に置かれていることが分かります。キリスト者が世界全体に仕えるべき存在であることが教えられていますが、何から始めてよいか分からないとき、まず身近にいる人々を愛するところから始めていくことができます。共同体において団結し、愛が充満すると、それが大きな力となって世界に働きかけていくものとなるからです。このイメージは、主イエスがまず弟子たちを訓練した上で世に派遣されたのと似ています。また、異邦人宣教の前にイスラエルに対して働きかけられたことともつながっています。

イエスはこの十二人を派遣するにあたり、次のように命じられた。「異邦人の道に行ってはならない。また、サマリア人の町に入ってはならない。イスラエルの家の失われた羊のところへ行きなさい。行って、『天の国は近づいた』と宣べ伝えなさい。(マタイ 10:5-7)

主の働きは、まずは小さいところから始まっていく。教会で、家庭で、忠実に愛の業が行なわれることからです。その「種」が生長し、やがて多くの実を結ぶものとなる。今日の箇所を一貫しているテーマです。

最後に、数カ所残った部分にふれておきましょう。

思い違いをしてはなりません。神は侮られるような方ではありません。(6:7a)

ガラテヤ教会内において、パウロへの不信感ゆえに、働き人をサポートしなくなる風潮が広まっていたと思われます。教会がそのような空気になるのは危険なことであり、その教会は神の国のいのちを失いつつあると言えるでしょう。働き人を支えるとき、教会は祝福を受けます。「宣教者を愛する → 祝福を受ける → 神の国が前進する」。この良循環を作っていきたい。

たゆまず善を行いましょう。倦むことなく励んでいれば、時が来て、刈り取ることになります。

(6:9)

パウロの念頭には、主の再臨があると思われれます。初代教会の人々は、その日は自分たちが生きている間に来ると信じていました。この感覚は、どの時代の人にとっても必要なことです。もしかしたら、私たちが生きている間に主は来られるかもしれません。いつ来られてもいいように、私たちは継続的に、心を込めて、隣人を愛すること、御言葉を宣べ伝えることに専心していきたい。自分の霊が眠りこけてしまわないように、常に気を配っていきましょう。

【結論】

今日は「天に宝を積む」ということを中心に御言葉を学びました。目の前のことだけを見るのではなく、「神の国への投資」ということをいつも念頭に置いて生きていきたい。私たちはとてつもない資産を持っているのです。神の国に属するものを奪うことのできる者はありません。地上のものはいつか古びていきますが、神の国は永遠に滅びることがない。主が私たちのすべての業をご覧になっているということを忘れずに歩んでまいりましょう。

【祈り】

人の隠れた行いをご覧になられる、天の父なる神様。良くも悪くも、私たちの地上の業はあなたによって評価を受けています。自分でも気づいていないことを、あなたをご存知です。願わくは、私たちのすべての思いと行いとが、御前に純粹でありますように。人の目ではなく、神の目にどう映っているか、そこにこそ集中させてください。主イエスのように生きることができますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

歴史の表も裏も知り、来るべき日に正当なる評価を下し給う、父なる神の愛、
家畜小屋での誕生から十字架に至るまで、神だけを見上げて歩み給うた、主イエス・キリストの恵み、

主に仕える人々との協働により、福音のことばをこの地に残させ給う、聖霊の親しき交わりが、

あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。